

平成 30 年
海外フィールドワーク
報告書

日時：2018年8月16日～8月23日

場所：スコットランド

横浜市立大学応用言語学ゼミ

海外フィールドワーク報告書

滞在先：スコットランド

日程：2018年8月16日～8月23日（24日帰国）

私たちはまず16日～18日にかけて市街視察を目的にエディンバラを散策し、スコットランド国立博物館、エディンバラ城、ホリールド宮殿などを回った。そこでは主にスコットランドの歴史や文化を学ぶことができ、スコットランドの長い歴史を様々な展示物やパネルを通じて感じ、学ぶことができた。それらの観光名所で印象的であったのはエディンバラ城である。エディンバラ城内には戦争で活躍した将軍の功績をたたえたメダルの数々が展示され、当時の戦争の様子を描いた絵画なども描かれていた。そこからは今は観光名所となっている場所も残酷な戦争の跡であり、スコットランドという国は残酷な歴史の上に形成されている国であるということが感じられた。また、エディンバラ市内での食事はフィッシュアンドチップスや羊肉のミンチを上げたハグスという料理、地元で作られたスコッチやエールを食べ、より現地の生活を体験することができた。私たちはある小さな教会でウィリアム・シェイクスピア作の『お気に召すまま』を鑑賞し他ののだが、日本で劇を鑑賞するというと劇場などを想像するのだが、スコットランドではワインや軽食を持ち込み野外で小さな劇を披露しているのが見かけられた。市内でも劇のチラシを配っている人がたくさん見られ、あちらこちらでパフォーマンスが繰り広げられており、日本よりもスコットランドでは芸術や劇といった文化が身近なものであり生活の一部になっていると感じた。

そして英語に関しては、日本の英語教育はアメリカ英語が基本となっているので、私たちゼミ生はイギリス英語のリスニングに苦労し、地方によってはアクセントもあるため、現地の方々に話しかけられると苦労する場面もしばしばあった。しかし、スコットランドはスコットランド語、ゲール語、英語という多言語国家のため日本人にも寛容で、私たちが聞き取れていない、理解できていないと感じた時にはゆっくり話してくれたり優しく話しかけてくださり、多言語国家だからというわけではないが言語が通じにくい場面に慣れているのだろうと感じた。また帰国時の空港では空港スタッフが着用しているジャンパーに4ヶ国語で「Welcome」と書かれているなど、応用言語学ゼミとして多言語が使われている実例を見ることができ、今後の研究に活かすことができると感じた。

19日～22日にはJ-CLIL開催の学会に参加した。そこでは今まで論文などでお名前を拝見したCLIL（母国語以外の言語を使い教科を学ぶ学習法）を牽引している今まで論文などで名前を見かける先生方や、実際に教育の現場でCLILを実践している先生方の講義を聞くことができた。特に私が印象に残っているのはDo Coyle先生の講義だ。CLILは文化的に学ぶことであり、communicationとcontentとcognitionが相互に関係することで文化が形成されているということを知ることができた。22日には私たちゼミ生が4つの班に分かれ、スコットランドの言語使用状況やCLILに関してプレゼンテーションを行った。研究不足の箇所が多々見られ、土屋先生にアドバイスを貰いながら前日まで準備を行った。普段ゼミでも英語で発表を行っているが、英語が堪能な先生方の前で発表する機会はなかなかないので緊張した。しかし、プレゼンテーション後には先生方にお褒めの言葉をいただいたりコメントをいただくことができ、私たちゼミ生にとって学会参加し、発表するという貴重な体験をすることができたと思う。

今回のフィールドワークを通じて、知識だけではなく実際に滞在することで見てきたスコットランドの文化を体感することや学会に参加し貴重な体験ができ、有意義な海外フィールドワークであった。それは、今後の学生生活や自分たちの研究に活かすことができる。

海外実習報告書

国際総合科学部応用言語学ゼミ

160720

和田優也

今回私は言語教育に関するワークショップに出席する為に、ゼミの先生と所属する学友らと共におよそ1週間スコットランドに滞在した。ワークショップに出席して、またスコットランドの街に滞在して言語教育について、また芸術に対する人々の意識やスコットランドという国の帰属意識について様々なことを学んだ。

約1週間の実習期間の内4日をスターリングという都市に滞在し、日本 CLIL 教育学会が主催するワークショップに参加した。日本人の研究者やスコットランドをはじめとする他国の言語学者と会話する機会があり、どのような言語政策や言語教育を行うべきかについて専門家の話を聞いたり、実際に話し合うことが出来て良い経験になった。また教師や言語学研究者などを中心とする参加者らに対して、我々もグループ発表を行った。私のグループはスコットランドの言語について調べ発表した。彼らにとっては稚拙な発表だったかもしれないが真摯に耳を傾け、質疑応答時には様々な指摘や意見を頂戴することが出来た。大学の授業内で行う発表とは緊張の度合いも異なり、貴重な経験であった。

このワークショップはスターリング大学で開催された。スターリング大学は1960年代に設立されたとても新しい大学で、山に囲まれた自然豊かで美しいキャンパスを持つ素敵なおとこであった。大学の中心には広大な湖がある公園のような環境で、学校を歩いているだけなのに不思議と清々しい気分になれた。建物の中には様々な色で彩られ、食堂もとてもお洒落で、図書館の脇には卓球台が置いてあるなど、学生が快適に大学生活を送る環境が整っていると実感した。

それ以外の期間は主にエジンバラに滞在した。特に旧市街は多くの歴史ある建物が並ぶ見事な街並で、日本とはまったく違う表情を持つ都市だった。エディンバラ・フェスティバル開催中であったため、市街を歩いていると、演劇などのチラシを配る若い人達がたくさんいた。私達も教会の庭で行われたシェイクスピア劇「お気に召すまま」を鑑賞した。その日は雨だったが多くの人が劇を観に来ていた。またエジンバラには国立博物館と国立美術館があるが、そのどちらも入場が無料だった。この事は、スコットランドには劇を観る習慣があり、博物館等が無料で人々が気軽に訪れることが出来る場所だということを示しており、人々の芸術分野への関心の高さは日本とは比較にならないものだと感じた。ちなみに、そうした博物館やその他官公庁の建物などにはユニオンジャックのみならずスコットランドの旗も掲げられていた。私はイギリスの他の地域に行ったことがない為比較は出来ないが、この事はスコットランドの人々は自らがスコットランド人である、という意識を強く持つことを表しているのではないかと感じた。現にスターリングにあるウィリアムウォレスの記念碑の内部には、スコットランドーイングランド間で行われた戦いを紹介する部屋があり、そこでイングランドはさながら「敵国」「侵略者」のように描かれていた。日本では、例え戊辰戦争や薩摩の琉球侵攻のような場合でも、同じような描かれ方はされないだろう。イギリスという1つの「国」の内部でも、各地域に住む人々の意識は違うものだと感じた。

応用言語学ゼミフィールドワーク報告書

滞在先：エディンバラ、スターリン（スコットランド）
日程：2018年8月16日（木）－8月24日（金）

我々応用言語学ゼミの学生7名と教授の土屋慶子先生を合わせた計8名は16日成田空港の出発し、オランダのアムステルダム空港で飛行機を乗り継ぎ、現地時間で同日スコットランド、エディンバラ空港に到着した。翌日からの二日間、17日、18日はエディンバラ市の街を視察した。その中でも、エディンバラ城やエディンバラ宮殿はスコットランドのこれまでの歴史を多く学ぶことができた。特に宮殿は、現在も夏の時期に王家が使用しているということで、とても驚いた。建物の構造や、外飾や内飾も歴史や王家の威厳を感じさせる作りであった。権力を表すためだけに作られたベッドや、王家の人々が集めたとされる数々の絵画などがその例であった。また、エディンバラ市での食事はスコットランド、イギリスの郷土料理である、フィッシュ・アンド・チップスやハギス（羊肉のミンチを固めて天ぷら状にしたもの）、地元で作られたエールやスコッチなどを楽しむことができた。エディンバラ市はスコットランドの歴史や文化を学び、感じる場所として最適な場所であった。

翌日は、本フィールドワークの最大の目的である、CLILのワークショップに参加するため、スターリン大学へ向かった。今回のCLILのワークショップは、日本CLIL教育学会の会長であり、前期の講義でお世話になった笹島茂先生が我々横浜市立大学の学生に大学での研究をプレゼンする機会を設けてくださった。プレゼンは最終日であり、それまではCLILについて様々な研究をされている各国の先生方の報告を聴いて勉強させていただいた。その中で特に印象に残っているのは、CLILについての研究の中心的人物であり、エディンバラ大学の教授でもあるDo Coyle教授のプレゼンである。Pluriliteracies（複合リテラシー）の今までの概念に加えて、デジタルリテラシーと感情リテラシーもその中に含まれているということで、ただ単に複数の言語上におけるリテラシーだけでなくそのような分野もカバーするものである、ということが新しい発見であった。また、これまで文献上でしかその名前を見たことがなかったため、実際にお会いして直接お話を聞き、質問することができて感激した。最終日のプレゼンでは、これまで大学で行っていた研究成果や、これまでの自身の経験から考察したCLILをはじめ各テーマについて発表し、様々な感想や、貴重なアドバイスをいただくことができた。

本ワークショップは、様々な国で教職をされている方のお話をたくさん聞き、教員を目指す身分として多くの知見をえることができた。今回、我々学生を招いてくださった笹島先生をはじめ、ワークショップに参加された先生方、引率してくださった土屋先生、ゼミのメンバー、関係するすべての皆さんに感謝して、フィールドワークで得たことを活かし、今後の勉学にもより一層力を入れて邁進していきたい。

フィールドワーク報告書

2018.8.16～2018.8.24

渡航先：スコットランド

170734 吉田麟太郎

私は、移動日を含め9日間のスコットランドでの海外フィールドワークのため渡航した。スコットランドは緯度が高く、気温が平均15℃くらいで日本と気温差が大きかった。天気は曇っていることが多く、小雨が降ることもしばしばあった。まず、16～18日の3日間はエディンバラで市街視察をした。私はこの視察で多くを学んだ。まず、スコットランドの言語や文化である。スコットランドの言語は英語だが、日本でよく聞く英語とは異なり、特有の方言がある。エディンバラは大都市なので移住民もおり全員がスコティッシュイングリッシュを話していたわけではないが、一部で現地の英語を聴くことができた。自分が知っている単語も聞き取るのが難しかった。

スコットランドの歴史からか、キルトやタータンがお店でたくさん売られていた。キルトはスカート状でタータン柄の伝統衣装である。ちょうどフェスティバルの時期だったので大道芸人が多く、キルトでバグパイプを演奏している人がいた。このように街を歩いているだけでも、現地の言語や文化に触れることができた。エディンバラではエディンバラ城、ホリールード宮殿を見学した。城は高地にあるため街を眺めることができ、城の中の展示室では第一次世界大戦時の日本の国旗や武器も展示されていた。宮殿では日本語の音声ガイドがあったのでただ見るだけでなく、説明もきくことができた。私はガイドが日本語だったということもあり、宮殿についての理解が深まった。歴代王の絵画や様々な装飾品から王家のかけいについて学ぶことができた。特に宮殿を再建したチャールズ2世については何度もガイドの説明に出てきたため一番印象に残っている。彼はスコットランド国王として戴冠しており、宮殿の再建を命じた。

19日にスターリングへ移動し20～22日はJ-CLIL教育学会の研修に参加した。そこでヨーロッパの教師や現地講師の講義を聴き、自分たちも自前に調べたテーマについて発表を行った。講師の先生方の講義内容はレベルが高く、理解するのが難しかった。一番印象に残っている講義は、グループワークを含んだものである。他の講義に比べて聞いているだけの受け身の講義ではなく、実際にグループで活動するので自分から意見を発することを求められた。内容としては、学校の教師として生徒に教える科目を設定し、どのくらいの期間でどれくらいのレベルまでの上達を目指すかなどを細かく設定するものであった。私は自身の実体験から意見を述べた。また自分たちが行った発表は、前夜まで準備を行い、メンバーと試行錯誤しながら頑張った。私のグループは日本の小学校におけるCLILについて発表を行った。J-CLIL教育学会の方々の前でこの内容を発表することもあり、とても緊張した。自分たちが発表に使用した文献の著者なども多数研修に参加していたので、とても貴重な体験になった。

また移動の手段として電車やバスを利用したが、目的地までの時刻、運賃やルートを自分たちで調べたり、レストランで席が空いてるかを聞いたり注文をしたりなど、自由度が高い分、自分たちで動くことが求められた。これは海外では当たり前のことだが、自主性が必要であり、今回のフィールドワークでそれらを経験することで自身の成長につながった。時折自分の英語がうまく伝わらないこともあり、スピーキング・スキルを高める必要性を痛感した。総じて、今回のフィールドワークはとても良い経験となった。

フィールドワーク報告レポート

日時：平成30年8月16日～8月23日（24日）

場所：スコットランド（エディンバラ、スターリン、グラスゴー）

20日から22日にかけて開催されるCLIL教育学会主催のセミナーへの参加と、22日に予定された自分たちの発表を控え16日にエディンバラに到着した。16日から18日までは市街視察を主としてエディンバラの街を歩いて回り、スコットランド国立博物館、エディンバラ城、ホリールド宮殿といったスコットランドの文化や歴史を学んだ。日本とは違う、「スコットランドらしさ」に様々な形で触れることができたと思われる。スコットランドと言えば、スコッチやキルト製品、バグパイプの演奏などが挙げられるが、観光地ということもありこれらはエディンバラの至る所で見受けられた。滞在期間中はエディンバラで音楽の祭典「ミリタリータトゥー」の開催期間であったため、街は人で溢れにぎわっていた。プレゼンテーションの発表テーマがスコットランドの言語についてであったこともあり、看板や説明書で、英語以外にゲール語で書かれたものが多数存在していることや、スコットランドで話される英語それ自体が英語の方言と言われるが、特に駅員の話し方が、英語話者ではない私たちでもわかるほどに訛りが強いことなど、言語に関して視覚、聴覚を通してそれを実感することができた。

19日からはスターリン大学へと移動し、20日からセミナーに出席した。Do Coyle教授をはじめとして多くの方々からレクチャーを受けることができた。Do Coyle教授のセミナーでは、CLILの発展と4つのフレームワーク（Communication, Content, Cognition, and Culture）について述べられ、これがより深く密度の高い”deeper” learningを可能にすることや指導側がいかにそれを応用しよりより学習へと導くのかを理解することができた。指導側の努力は、例えば学生の習熟度や理解度がどの程度であるのかを踏まえて学習過程を再考したり、CLILにおいては内容と言語習得が並行して応用されるのでその教科の理解と言語習得以外にも、言語を使って何かを考える、思考言語として応用できているかについて図りながら進めたりすることが重要であるといえる。指導側の努力という点で、Kevin Shuck氏のセミナー（ワークショップ）でも実際に体感した。それまでのセミナーではヨーロッパの国々でいかにCLILのような学習方法が取り入れられ他の分野でも応用可能であるのか、日本ではどのように推進されるべきかなどが話し合われていた。Kevin氏のセミナーでは実際にグループワークを通してテーマを決め指導側がどうしていくべきか、生徒側はどのようにするべきかなどを話し合いながら紙にとめる作業をした。私の班は教科を体育に決め、「長縄とび」をテーマに話し合いをした。体験やセミナーを通して、現在の日本では確かにCLILは取り入れられ始めているが、元来続く日本の教育体制との不適合さが見受けられた。小学校から大学まで様々な立場の先生方に話を伺うことができ、国の推進したい「グローバル人材教育」と現在ある教育体制、そしてCLILなどの教育方法つまり学会の先生方が取り入れたい教育方法がうまく噛み合わないことへの課題など、一言にCLILといってもヨーロッパのCLILを取り入れるのではなく、日本のCLILなるものを作り出す必要があると一貫して述べられていたように思う。

最後に、貴重な時間を頂いてプレゼンを行なったこと、ディスカッションポイントとして挙げた質問について話し合いができたことは非常に貴重な体験であった。特に私のグループテーマが「言語」であったことで、言語的マイノリティーの公的保護の必要性についてのJohnstone教授の、マイノリティーと呼ばれる言語の話者たちのそのような自覚についての意見や「アイヌ語を学びたいと思うか」という質問は、今後言語についての研究を進めるうえで重要なものであった。1週間という短い期間で学びの多い貴重なフィールドワークであったと感じている。

フィールドワーク報告書

〈日程〉

- 8月17日 ナショナルミュージアム、エディンバラ城観光
- 18日 ホリールード宮殿観光、シェイクスピア劇鑑賞
- 19日 スターリンへ移動、J-CLIL 学会レセプション
- 20日 J-CLIL 学会研修、ウォリスモニュメント観光
- 21日 J-CLIL 学会研修
- 22日 J-CLIL 学会でプレゼン発表、エディンバラへ移動
- 23日 帰国

〈FWに参加しての感想〉

まず、スコットランドに到着し街並みのきれいさにとても驚いた。街全体がハリーポッターの世界のようでこれこそヨーロッパという感じがした。初日はゼミ生みんなが写真を撮るのに夢中になっていた。エディンバラでは様々なところを観光したが、どこも素敵でスコットランドの歴史の長さが改めて感じられた。特に印象に残っているのがエディンバラ城である。エディンバラ城はエディンバラのシンボリック的存在となっていて、城内では将軍の勝利をたたえるメダルなどが数多く展示されていた。昔の実際の刑務所も見学することもできた。城内を見学して、現在では観光名所として多くの観光客が訪れる場所となっているが、その歴史は非常に長く中には残虐的な歴史もあり、数々の戦いを経て今このような姿として存在しているということを知った。全体として、スコットランドの人たちはとても親切で、街のあちらこちらで大道芸や歌のパフォーマンスが繰り広げられ、その周りに人々が集まり賑やかであったことが、街の温かみを感じられとても印象的だった。

エディンバラで観光をしたあとはスターリンに移動し、スターリン大学でJ-CLIL学会に参加させてもらい先生方からのレクチャーを受けた。主に日本の先生方が多かったが、スコットランドはもちろん、フランスやオランダの先生のお話も聞くことができとても充実した時間になった。特に Kevin Shuck 先生のレクチャーでは各自で決めた教科の指導計画を考えるというグループワークを行った。指導目標を length, width, height, time の四つの視点で具体的に考えると、目標が明確になり指導しやすいということを知った。普段指導する立場で考えることがなかったので貴重な体験ができ、また、同じグループになった日本の先生方から生徒に教える上での実体験を教えていただき学ぶことが多くあった。私はゼミの個人研究で小学校の英語教育などを研究しているので、今回の CLIL のレクチャーから、また次の研究にも活かしていきたいと思った。フィールドワーク全体を通して、実際に行ってみなければ体験できないようなことも体験でき、とても有意義で充実した1週間を過ごすことができた。今回のフィールドワークに参加してよかったと思っており、学んだことを次に活かしていきたいと思う。

土屋ゼミ フィールドワーク報告書

1、はじめに

今回、私たち応用言語学ゼミは夏季フィールドワークとしてスコットランドを訪れた。そこでは、J-CLILの学会に参加し、教授や学者の方のプレゼンテーションを見学したり、私たち自身もプレゼンテーションを行い、アドバイスをいただいたりなどした。そのほかにも、お城や宮殿をはじめとする歴史的建造物を見学し、スコットランドの歴史に触れたり、街を散策することでスコットランドの文化について肌で感じる事ができた。

このレポートでは、それらのスコットランドで学んだことについて報告したいと思う。

2、J-CLIL学会にて

私たちはスコットランド滞在中で三日間にかけて、スターリン大学において開催された日本CLIL教育学会のセミナーに参加させていただいた。その学会においてはまず、教授や学者の方々のプレゼンテーションを見学した。自分自身CLILというものについて深く触れたことがこれまでなかったので、今回のセミナーでは、CLILというものの定義や意義を改めて認識することができた。母国語以外で科目に焦点を当てて学習を進めつつも、言語の教育も行うということの難しさや、達成できたときの利点などについて、現役の小・中・高校の先生方や大学の教授、研究者の方々と考察し、より良い教育について意見を交換し合ったりした。

また、私たち自身のプレゼンテーションでは、普段のゼミで学んでいるようなことを中心としたプレゼンテーションを行った。そこでは、英語で人に何かを伝える難しさははっきりと分かった。また、プレゼンテーションを行ってくださった他の教授方との伝え方の上手さから学ぶ部分もとても多くあり、プレゼンテーションの内容についても貴重な意見をいただくことができた。

3、歴史的建造物・街の見学にて

今回のフィールドワークでは、自由時間をはじめとした、大半の時間を街で過ごした。その中で、城や宮殿やモニュメントなどの歴史的建造物からスコットランドの歴史について学び、肌で感じる事ができた。また、街の建造物自体もとても洗練されており、歴史や異国情緒を感じることができた。

食事も現地のレストランなどで行うことが多く、現地の食文化に触れることができた。イギリスはあまり食事がおいしくないということを聞いていたが、実際に食べてみると、とてもおいしかった。物価という面でもスコットランドというものを味わうことができた。

全体として、とても満足のいくフィールドワークとなった。今でも滞在していた時間を大変貴重なものであったと感じるし、現地の人との交流や、パブなどでの食事、飛行機での移動時間の長さなど、何から何まですべて貴重な経験であったと感じる。今回のフィールドワークにおいて無駄な時間はなかったと感じる。